

# ご挨拶



滋賀県立大学理事長・学長 井手 慎 司

湖風会「工学部学友会」の第七回総会が、工学部ホームカミングデーと同日に、滋賀県立大学で開催されることに心よりお祝い申し上げます。

学友会の皆さまには、日頃から学生の会社訪問や工場見学の開催など、本学工学部の教育に継続的にご協力いただき、心から感謝申し上げます。今後も学友会と工学部が連携を一層深めながら、このような活動を共に展開していけることを期待しています。

さて、本年度は、本学が4年制大学となって30年目にあたります。同時に、第4期中期計画期間（令和6～11年度）が始まる節目の年です。言うまでなく、大学を取り巻く環境は大きく変化しています。大学の出口として育成が求められる人材像が変容しているとともに、入口として、入学してくる学生にも変化が見えます。そして、これらの変化は、少子化によってさらに加速することが予想されています。大学進学者数は2018年度以降、減少に転じ、昨年度は私立大学の半数で定員割れが起こったと聞きます。進学者数の減少がこのまま続けば、本学のような公立大学ですら、志願者の争奪戦に巻き込まれることは避けられません。本学の使命を堅持しつつも、そのような変化に対応して、大学として生き残るための、教育組織と教育の在り方がいま問われていると言っているでしょう。また、滋賀県では高度専門人材を育成するための県立高等専門学校（高専）開設への期待が高まっています。

このような背景を受け、また、滋賀県から示された第4期中期目標を達成するために、本学では3つの大きな柱からなる第4期中期計画を定めました。計画の一つ目の柱は、本学の強みを活かした学部・学科の再編です。中期目標において再編の検討が掲げられたことは、県の問題意識を明確に示しています。しかし、どう再編するかは本学に委ねられており、再編への県からの支援も期待できます。自分たちが変わりたいように変わるチャンスだと捉えています。

二つ目の柱は、内部質保証の一環としての教学マネジメントの確立です。学修者本位の教育の実現のための改善努力と、結果としての教育効果の可視化と公開が求められています。公開された教育情報によって、志願者が大学を選ぶ、あるいは大学が社会から評価を受ける、そのような時代になってきたということです。

三つ目の柱は、高専の設置です。令和10年4月の開校を目指し、先行していたハード面の整備に続き、教育内容やソフト面の整備がこれからの急務となります。それに加えて、産業界との連携の仕組みづくりや、高専への潜在的志願者層の開拓も必要となります。後者に関しては、ターゲットを小学校高学年にまで広げた、理系人材のすそ野の拡大に力を入れていく予定です。

特に、高専の開設においては、高専卒業生の編入学後の履修モデルの確立も含めて、工学部の協力と貢献が不可欠です。また、中期計画では、計画を実施するにあたっての方針として、卒業生との連携をより一層強化することを重視しており、その一環として、学友会をはじめとする同窓会との連携をさらに強固なものにしていきたいと考えています。

引き続き、学友会の皆さまには、会員相互の交流と親睦を深めるとともに、本学工学部および大学全体の発展にご協力いただけるよう、お願い申し上げます。